

39 田 芋 お ぢ

伝承地：西原町

参考書籍：6～8



(西原台地)

郷(池の辺郷)という地名にまつわる言い伝えである。

平安時代のなかがごろに編集された「和名類聚鈔」という日本最古の百科辞典には、古代下野国河内郡内に10の郷(村落)があったことを記している。それは、丈部、刑部、大統、酒部、三川、財部、真壁、軽部、池辺、衣川駅家の10郷である。

これらの諸郷は、それぞれ現在のどこにあたるかが推定されている。それによると「池辺郷」というのが、ほぼ現在の宇都宮市街地に比定されているようである。

ここで紹介する物語りは、この「池辺

平安時代のはじめごろ(弘仁年間)、池の辺郷の西原台地に「田芋おぢ」という漁師が住んでいました。田芋おぢは、毎日、西原台地のふもとにある池に魚を釣りに行っていました。

ある日の午後、田芋おぢはいつものように池のほとりで釣り糸を垂れていました。するとどこからともなく白髪の不思議な老人があらわれ、田芋おぢに向かって言いました。

「あはたは、今日この池で大きな魚を捕えるでしょう。しかし、その魚は殺さずに必ず池に放してあげなさい。そうすれば、後で沢山の魚がとれるようになりますよ。」と。

あまりの突然のことに、田芋おぢはしばらく口をあいたまま動けませんでした。やがて気を取りもどして、「はいわかりました。仰せのとおりにいたします。」と答えました。田芋おぢは、教えてもらったお礼にと、午前中にとった魚をあげようとしたのですが、老人は受けとらずに姿を消してしまいました。

しばらくすると、その老人の言葉どおり、田芋おぢの釣り糸に大きな魚がかかりました。

その姿はちょっと鯉に似ていましたが、見たこともない不思議な魚でした。田芋おぢは、丸々と太った肉づきの豊かな魚に見ほれて、放してやることをすっかり忘れてしまいその魚を家へ持ち帰って食べてしまいました。

すると、俄かに空がかき曇り、怪しい雲が天を覆ったかと思うと、間もなく物凄い大雨となり、田芋おぢの家を流してしまいました。続いて大地震が起きて、二荒山の東の岩が崩れ落ち、池の水を押し流してしまったため、多くの人が死に、池の魚もみんな田川へ流されてしまいました。

このことがあって後、池の水は涸れて陸地となってしまう「池の辺」の昔の面影はすっかり失われてしまったということです。

